

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	太陽の子千歳台二丁目保育園
施設所在地	東京都世田谷区千歳台2-8-23
法人名	HITOWAキッズライフ株式会社

1. 活動のテーマ

<テーマ>

からだ（さわってみたい）

<テーマの設定理由>

（テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など）

3歳児クラスの年度初めの環境設定の中に感触遊びコーナーがあった。興味を示す子ども達が多く「さわってみたい」に決定。

太陽の子保育園の理念となっている「つながり保育」、「心が動く体験」と「豊かな対応」でつながりを創造するとあります。

「見て触れて五感を豊かにする体験を重ね、見えないものをイメージする力、試行錯誤を重ねて課題を解決するプロセスをたくさん経験し、新しいものを創り出す力。この創造性を大切にする風土が日常的にあります。楽器遊びやスキンシップ、散歩の中で自然物の匂い、蛍光絵具等を使った製作活動などを保育に取り入れる中で日常的に五感を使った遊びを行う中で3歳児クラスの子子ども達に感触に興味がある様子が見られた為、「さわってみたい」のテーマとなった。

2. 活動スケジュール

4～5月 戸外活動の中で砂場遊びを行う。躊躇なく触れる子もいれば、砂が手にかかるのが嫌な様子で触れない子、保育者に作ってもらいたいたく(完成したもので遊びたい)「〇〇作って」と話す子どもと様々だった。興味はあり、遊びたいし、触ってみたいけれどそうしたらよいのか分からない様子の園児もいた。

5月 新聞紙を破ったり、丸めたりと自由に指先を使う。

5～6月 室内にタイルやスポンジ、貝殻やストロー等を自由に触れられる感触コーナーを設置し、自由に肌で触れ、楽しむ。

6～7月 夏ならではの氷遊びや色水遊びで水の感触に触れ、水の不思議を体験する

6～8月 マカロニ・スライム・はるさめ・ストロー・豆・小麦粉粘土・片栗粉粘土等の素材の違いを3グループに分かれて友達とじっくりと味わう。

6～8月 保育者や気の合う友達と室内用の砂(キネティックサンド)を使った造形遊びをじっくりと行う。

9月 砂場が完成。砂場遊び・泥遊びを友達や保育者とダイナミックに楽しむ。

12月2日 保護者と園庭の砂場遊びを一緒に楽しむ。

12月20日 生活発表会にて保護者にプロジェクターと資料を配布し、子ども達の活動のまとめを共有した。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

・スポンジ、ストロー、貝殻、ぶちぶち、人工芝、綿、モザイクタイル、フェルト、モール、カラーパッド、毛糸で感触コーナーを設置。

・小麦粉粘土、片栗粉粘土、キネティックサンド、粘土で感触遊び。

・スライム、マカロニ、はるさめ、豆で素材の違いの感触遊び、音遊び(小グループにて行う)。

・新聞紙、スズランテープ、絵具遊びを通して活動遊び。

・泡立てネット、スクイーズ(感触玩具)を利用し、好きな感触を満足するまで触る。

・砂場の工事、砂場の砂、雨よけシェード、ウッドデッキステップ、ベランダシェード、コンクリート用セメダイン、保護用L字クッション

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

1. 「さわりたい」の好奇心をどんな活動を通せば子ども達自身が主体的に探求していけるのかを毎日の子ども達の遊びを共有しながらスタッフで話し合いを重ねた。
2. 感触遊び：身近な素材(子ども達が普段使っているストローやスポンジ、綿等)をタイルに貼り付け、感触コーナーを設置、自由に興味ある感触に触れられる環境を用意。
3. 保育活動：活動の時間にグループで公園での砂場遊び、室内での新聞破りや園庭での氷遊びを設定、感触遊びが苦手な子どもも「友達や保育者と一緒」が楽しい様子で自ら触れる姿が見られた。また、砂場活動に興味がある子が多く「お砂場で遊びたい」「お砂触りたい」と何をしたいかを言葉で表現する子どもが増えた(サークルタイムにて。)保育者は子どもの声をキャッチし、自分の手で形を作り、遊びたい気持ちに気が付いた。
4. 園庭の裏にスペースがあったため、砂場を設置。子どもたちの「砂場遊びがしたい」を実現。室内で十分感触あそびができた子どもたちは、外でも新しい活動を行いたいと希望が出る。より自由度の高い砂を使った遊びを行うため、工事業者に依頼をして、砂場を園庭に作った。
5. お団子を作り見立て遊び、保育者や友達と協力しながらお山を作り一緒に遊ぶ楽しさを学ぶ。
6. 造形遊びに興味は移り、粘土や新聞などの素材を通して、自らの手で作り出すし、作った物で遊ぶ楽しさを実感。
7. 「さわってみたい」の探求から、素材で物を創り出すことが出来ることを知った。また、それらで遊べることも学んだ。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

感触遊びコーナーでタイルを触ると『ツルツルが好き』と自分の「好き」の感情を言葉で発言したり、はるさめやマカロニは水に漬ける前と後で感触が違ったようで「かたい」「あっ、やわらかくなってる」と新しい発見をした。

その他にも新聞紙遊びでは「破けないように優しく持って」と力の入れ具合で紙が破けるのかそうではないことを知ったり、小麦粉粘土は「もちもちのパンみたい」と自分たちが知っている身近な食材を伝え、言葉で表現したりする。感触だけではなく、豆をコップに集めて、「カラカラ音がする」と耳で聞き、音も楽しんでいた。

保育者はそんな子ども達の様子から「次は片栗粉粘土してみる?」「先生もどんな感触がするのか分からないからやってみたい」等、子ども達と同じ目線で会話し、同じように新しい発見を探していった。

砂場工事が整い砂の搬入の日。大量の砂袋が置かれ、砂が入る様子を楽しむ大人の姿をみて、子どもたちもこれは自分たちが遊んでよい場所になることを理解して「袋に入っている砂は固い」「砂場に入った砂はさらさらしている」感触を確認し、ダイナミックな砂場の環境に協同遊びのイメージが膨らんでいった。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

子どもには一人ひとりの感触の好み『やわらかい・かたい・つめたい・ぶにぶに・ざらざら・すりすり』があることにまず気が付いた。そのような自分の好きな感触、興味がある素材には、満足するまで触り、自分の「好き」を見つけていく様子があった。

その「好き」で十分に遊ぶことによって遊びの展開が広がっていった。例えば粘土遊びでは、粘土に触れ→手で形を作る→丸や四角等の造形を作り出す→おままごとの見立て遊びに使用する、→友達同士や保育者と一緒におままごとを楽しむ、など自然と遊びに取り入れ、発展させて行く様子があった。

造形遊びが発展することによって、ブロックやLaQ工作遊びなどの自分の手で作り出す面白さに子ども自身が気が付き、12月には工作コーナーを保育室内に用意し、『こびと図鑑』のこびとを新聞紙とノリで作ってみたいと「これを作ってみたい」と意欲を示すようになった。

「さわりたい」から始まった探究は活動を進めるにつれ、感触の面白さ・手で作り出す楽しさ・保育者や友達と遊ぶ嬉しさ・考える力を育てていった。

外での砂場遊びをおこなったことで、室内遊びでもさらに遊びの幅が広がった。今は子どもたちはこびとあそびを行っていて、イメージを子どもたちが自分たちで考えて生み出して遊ぶような姿が見られる。次年度は子どもたちが遊んでいるこびとあそびを起点にしたこびとの住む家作りを始めとした協同創作活動を実施することで、子どもたちの豊かな感受性や創造性を高める活動を行いたい。

保護者を園に招いて、保護者も砂場遊びに参加。保護者や地域の方とも連携して砂場活動の継続を模索していきたい。